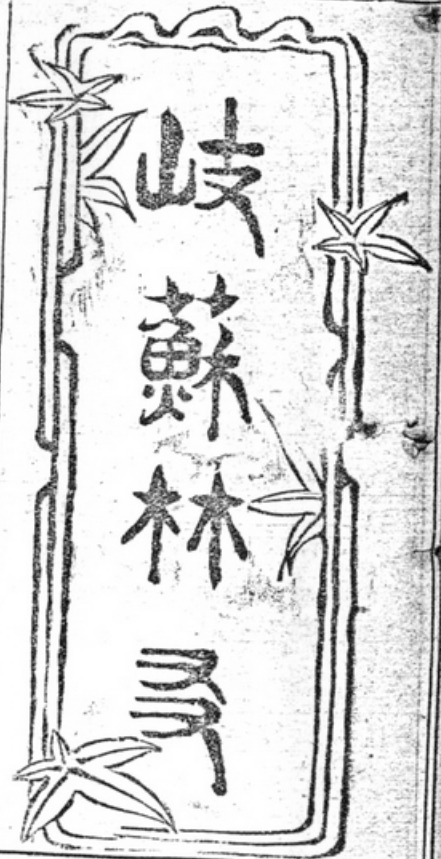


友林蘇岐

(一)



寄附金募集廣

今般江畑校長岐阜縣、御榮轉被成候
 就ては先4多年の勤勞に酬ゆる爲
 紀念品を増呈し聊か報恩の微息を表
 し度候間何卒右趣旨御賛同被下應分
 の御寄附に預度乍累儀以誌上得貴意
 候頓首
 定致候由左様御承知被下送金は
 征矢野茂樹宛に郵上候尙振替は一
 時中止致居候間是亦御承知を乞ふ
 八月

卒業生各位

木月
 山林學校 校友會

論說

樹木の賜

七宮生
 ドクトル、ハンター、マクガイヤ氏曰く昔て

大正元年八月二十三日印刷
 大正元年八月二十五日發行
 編纂發行人
 長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
 安井正夫
 印刷者
 長野縣松本市本町百八拾四番地
 兎澤忠雄
 印刷所
 全縣全 市全 香地
 交文社
 發行所
 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地
 蘆澤書店

○岐蘇林友 目次

- 論說 樹木の賜……………七宮生
- 學術 螢火に就きて……………佐藤生
- 文苑 島の林樹界……………sh生
- 雜報 鞍馬峽に……………久保田洋舟
- 附錄 遊ぶ記……………細江道入
- 附錄 馬車山に遊ぶ……………都竹梨村
- 附錄 獨語……………狂夫生
- 附錄 山林學校及寄宿舎便り
- 附錄 通信……………編輯局より
- 附錄 會費及寄附金領収報告
- 附錄 二年生修學旅行日誌

生來盲目の一青年の両眼を施術し健全にせしことありしが其當時此世の内最も美なるものは何なるかと問へしに直ちに樹木と答へたりと

吾人母の胎内より出で、より常に此ものに接し此ものを見一日として此ものと吾人の網膜に映せざることなきも尙且つ此美を認む況んや生來の盲者俄然明を得たる一青年に於てをや是に於てか風光上樹木は必らず其一大要素なることを知るに難からざるべし過般本多博士木曾風光調査の爲めお出になり木曾峽中殆んど到る處日程の許す限り詳細に調査せらるゝに當り世人の所謂風景佳良と稱する處と博士の以て佳景とする處と往々一致せざることあるは隨行者一同の等しく認むる所なるべし則ち木曾峽の山河殆んど一目の裡にある小圓山及妻籠の城山に登りても共に木曾の風光として過小なりとし寢覺に到りては兩岸に鬱々たる美林なく且つ破壊の跡見ゆるを嘆ひ而して却て鞍馬橋下より見たる景賤母街道の景を激賞し或は到る處に行道樹の必要を説きしは蓋し樹木を離れたる觀察と離れざる觀察との差の由て來る所なるべし則ち博士は風光と樹木

木殊に破壊の跡なき自然樹木とは離るべからざるものにして自然の樹木を離れて風光なしとするの觀察眼より斷定せられたるものと見て大なる誤解なからんか

ゼツヘリース氏讚美して曰く
 晝間夜間將た夏冬の別なく、樹下に心は遠き天空を意味する人生の奥妙に漸近を感ず、美理想及純潔に於てのみ見出さるゝ精神の休養はるゝに近よる、何んとなれば其距離は思想の達しの内に見ゆる故にと

又たルボック氏曰く
 自然は薄暗く陰鬱なる時には慰藉し輝いて美なる時には精神を爽快にするのみならず總てのものを靈感鼓舞せしむと

又たアポット氏は樹木は吾人に大なる教訓を與ふることに就て述べて曰く
 初春に樹木のある所に行け而して膨大する所の發芽を注視せよ是は樹木の最も忙はしき時なり而かも彼は靜肅に且つ攸々として働く此際狼狽激働する樹木に就ては未だ曾て聞かぬ……………

尙ほ附言して曰く
 樹木に一日を費すことが出來て而かも少

しも惻怛にならずに歸宅する學生は實に憐れむべきものなりと

炎熱燻くが如き夏の日に葉の天蓋の下の愉快暴風雨の際の避難所は共に是れ樹木自由の賜なり加之是により純潔にされたる空氣の新鮮なる芳香の爲めに吾人は各呼吸を以て吾人生命の延されたる賃借權を得而して心は體と同様復活すと

自然は自然を愛する總ての人を其返禮として愛す而して充分なる報酬を與ふべし然れども其報酬たるや世間普通所謂良きものを以てするにあらずして此世の中最も良きものを以てすべし金銀爵位馬車自働車を以てするにあらずして實に思想を高尚立派にし心を満足平和にし以て其報酬となすべしと

又た本博士曰く山水風景は世界的美術にして所有主より見れば一の資本なり巧みに是を利用する時は實に幾十萬圓に匹敵す風景も亦た豈に忽にすべけんや故に天賦の美景を有するものは必らず樹木の賜なることを深く銘し長に其恩澤に浴せんことを努むべきなり今より殆んど二百年前佛國の思想家ルーソー曰く天然は麗はし自然に出づるものは總て美なり人の手により腐敗すや鴻大なる哉樹木の賜吾人唯だ常に虞る所謂人の手により腐敗するなきかを

學 術

螢火に付きて

螢火に關しては未だ研究多からず従つて其理論も未だ明かならず近年我國に於て渡瀨博士の之れに關する研究あり今之れに付きての畧説を示さん

一、螢は何の爲め光を發するかと
二、幼虫 少なき薄き黒色を帯びたる一分程の蛆なり此の蛆の尾端には奇麗なる發光器二つあり親螢の如く少しの刺激にても受くる時は直ちに發光す毎夜出で餌を求め晝間暗黒なる所に陰し居り漸次成長し來年の春に至れば一寸位の成長肥滿せる蛆と成る光の度漸く強くなる故に川の洲の管の如き所に澤山居る故捕ふるを得べし而して四月下旬或は五月月上旬即ち螢の發生する二週間位前に至ると河岸の地の中に降り小窟を作り遂に蛹化する

て發光器の色の黄色に見ゆるは全々此の許多の微粒の透明なる膜を通じて見ゆるなり此の細微の粒は即ち發光体の原体なり若し空氣に觸ると時は直ちに光を發するものなり併し此の發光物質は多小の水分無くしては發せず又空氣に觸れざれば光らず一種の燃焼たり即ち酸化作用たるなり只螢の發光原質は一種の脂肪の如き者にして化學上其だ巧みに出來てたる故酸化の折直ちに其勢力が光に變じて吾人の眼には何等の關係も無き熱線を出す事なきなり而して此の脂肪質の發光原質は燐素と何等の關係なし

て光を放つ者なれば煙の光に供ふ事なく眼を刺撃するに最大の効力ある光のみを出して視力に關係なき熱の爲めに其原質を元費する事なし

四、もつこく (木厚皮) 山茶科 特産と稱す可きものならざらんも島の山野至る所に天生し比較的直幹無節の良材を産す、古來白蟻の寄生及毒蛇ハブの侵入を豫防の効ありとて琉球地方に輸出し近時旋盤工材として大阪地方に積み出しつゝあり材紅褐色にて頗る美し

發光器を如何にして發光せしむるや前述の如く發光物質を以て充たされたる細胞と細胞との間には無數の毛細血管分布し呼吸の際体中に入る外氣中の酸素は此の毛細血管分布し呼吸の際体中に入る外氣中の酸素は此の毛細血管を通じて遂に發光現象を起すものなり即ち換言すれば發光の基礎は第一、螢の体中に發光性物質の存在 第二、酸化用毛細血管の存在 第三、酸化用毛細血管の存在 第四、酸化用毛細血管の存在

島 の 林 樹 界 (其三) 在種子嶋 S S 生 天然生の百日紅にして之と異なる所は喬木をなし枝細岐し葉面粗、長階圓形にて花白く複總花序をなし好んで溪谷河岸に繁茂し夏の櫻とも稱すべき美觀あり材堅緻にして樹皮滑美雅緻あるを以て工藝上に利用の價値あらんも未だ其例なし

五、まるばくにけい 樟科 海岸に部落をなし天生する半喬木にして葉革質卵形三肋あり葉裏に銀毛を有し果に一種の蟲嚙を著く未だ其寄生昆蟲を詳にせず形鈍多角形にして蝸牛に似たり嶋人つんなめのきと稱すつんなめは蝸牛の方言なり防潮防風樹として田畑家屋を保護し松林の疎開を補ひ且つ之の喬木に過ぎ田畑を庇陰するに換ゆべし

八、ふやう木(芙蓉木) 及たはまばう 錦葵科 ふやうは由來支那の産なりと稱せらるるも島の海岸には天生多く其栽培品に比し海岸性野朴なりと雖も初夏より晩秋に亘り淡紅色の美大なる花を開き路傍畦畔り

一大裝飾たり其皮は繩となすべく根皮は以て黒焼し腫物の治療に効あり
たはまばうは黄槿に似たれども常緑喬木をなし莖葉花共に大にして海岸に天生し防風防潮の効あり材は黄色にして裝飾材として黒柿材に比すべし
九、うらじろえのき 楡科
嶋には天生なく屋久嶋以南には伐採跡地の沃地に叢生す葉梗に似て大葉裏白き故に此の名あり生長早くして五年乃至十年にて幹圍三尺内外高四五間となり材質輕軟にして桐に類し下駄材に賞用せられ一本山元にて一圓内外の價値あり荒仕上げをなす時は二三圓となるを以て近時競ふて之が栽培をなす曰く千本を蓄積せば以て一家を支ふ可し一萬本を仕立てんには中流の資産家たるを失はず併も適潤肥沃の地ならざれば其効を收め得ざるを以て十萬百万を栽培して年々一萬圓十萬圓の収入を納むる事は需用上より考ふるも困難なるべし

十、ぎよぼく 白花葉科
海岸及山地の暖所に天生する落葉小喬木にして葉三小葉ありいものきに似る花は繖房花序をなし四瓣の白色花を有し雄蕊多數一寸内外に延び花被を壓して裝飾を兼ね觀賞に値す雌蕊は長き梗を有し其頂端に子房を具へ長く花上に出出するは多く他の植物に見ざる處なり材は下駄材鳥賊の餌木とし梨の如き果實を結ぶ果に肉を葉子をつくり種子より油を搾ると雖も未だ例を見ず
十一、くろつく (光榔) 椰子科
天生少なきも學校に近く一叢林あり發育熱帶地に及ばざるも丈餘に近きもの多し葉は羽狀にして三尺以上一間に及び棕栝

の如く單立せずして大小叢生す雌雄異株雌花は顯著ならず花梗狀に苞狀の突起をなすのみなるも雄花は多數に分裂せる枝狀小豆に似たる蕾を密着し黄色赤色にして三花蕾の開くや強き芳香可餘に馥郁たり壯觀又言ふ可からず毫毛は黒くして少きも保存期極短に十倍する故に利用さる蒲葵棧竹棧欄と共に熱帶的を示せり
十二、やまもがし 山茂櫻科
偏く山野を通じて天生多き常緑闊葉樹にして七月下旬總狀の白花を枝頂に着く材は廣き髓線を有し飽削面美しく又割裂し易し故に從來やまびは(泡吹科)と共に砂糖材として利用されつゝあり
十三、うてつ (蘇鐵) 鳳尾蕉科
前世紀の植物として隱花と顯花の兩植物の中間植物として六線樹と共に其生殖細胞は二個の精子なる事により著名なる本植物は往時救荒の備として南方より移植したるものゝ如く現今には山野路傍畦畔庭園に伴天生の狀をなせり莖は圓柱狀にして葉痕鱗狀をなし皮層を守り内部は塊莖の如くゴム狀液及澱粉を含めり根には一種の根瘤細菌及藻と共生すこれよく瘠薄の地に生育を全ふする所以にして莖上及根元より幾多の枝極葉を萌芽し其大なるものは徑貳尺高四五間に及ぶものあり花は莖頂に生じ雌雄異株にして雄花は松の毬果長大なるものゝ如く徑三寸長一尺内外あり心皮の裏面に葯を有し雌花は羽狀葉の 二變じ萎縮して毛茸を多く着け其基部に大豆大の胚珠を裸生す秋日熟して丹波栗大なる胚乳は澱粉を含み一升より二合の精製粉を得可し又莖の内部を飽削し醱酵せしめて食用とする救荒の備にして甘藷傳來以來餘り用いられ

の如く單立せずして大小叢生す雌雄異株雌花は顯著ならず花梗狀に苞狀の突起をなすのみなるも雄花は多數に分裂せる枝狀小豆に似たる蕾を密着し黄色赤色にして三花蕾の開くや強き芳香可餘に馥郁たり壯觀又言ふ可からず毫毛は黒くして少きも保存期極短に十倍する故に利用さる蒲葵棧竹棧欄と共に熱帶的を示せり
十二、やまもがし 山茂櫻科
偏く山野を通じて天生多き常緑闊葉樹にして七月下旬總狀の白花を枝頂に着く材は廣き髓線を有し飽削面美しく又割裂し易し故に從來やまびは(泡吹科)と共に砂糖材として利用されつゝあり
十三、うてつ (蘇鐵) 鳳尾蕉科
前世紀の植物として隱花と顯花の兩植物の中間植物として六線樹と共に其生殖細胞は二個の精子なる事により著名なる本植物は往時救荒の備として南方より移植したるものゝ如く現今には山野路傍畦畔庭園に伴天生の狀をなせり莖は圓柱狀にして葉痕鱗狀をなし皮層を守り内部は塊莖の如くゴム狀液及澱粉を含めり根には一種の根瘤細菌及藻と共生すこれよく瘠薄の地に生育を全ふする所以にして莖上及根元より幾多の枝極葉を萌芽し其大なるものは徑貳尺高四五間に及ぶものあり花は莖頂に生じ雌雄異株にして雄花は松の毬果長大なるものゝ如く徑三寸長一尺内外あり心皮の裏面に葯を有し雌花は羽狀葉の 二變じ萎縮して毛茸を多く着け其基部に大豆大の胚珠を裸生す秋日熟して丹波栗大なる胚乳は澱粉を含み一升より二合の精製粉を得可し又莖の内部を飽削し醱酵せしめて食用とする救荒の備にして甘藷傳來以來餘り用いられ

文苑

鞍馬峽に遊ぶの記

久保田洋舟

余學期試験後實習中の日曜開一日を得て學友十有七名と共に王瀧村鞍馬峽に遊ぶ、七月二十八日晚起きして仕度を調へ握飯を携へて約東の集合場なる大手橋に至る、二人來りてやがて全員集合す、六時出發の豫定が七時となりて漸く發す、福嶋町を離れ行人橋を渡りて道を王瀧口(御岳登山道)に取る
王瀧口と黒澤口とありに取る
行く行く御岳への登山の人々下山の人々に數多相遇ひぬ、途中一行にしばし別れて〇君と二人岐路に入りて所謂木曾義仲の手植

の櫻を見る、樹は太き徑六尺高さ廿七八間あり、根元より二間程上りて四股となりいと古りて見ゆ、傍には阿彌陀如來を祀れる一堂あり、櫻樹の前に立てられたる標札に曰く
歴誌
常阿彌陀如來は勸請年月不詳と雖往古惠心和尚(凡一千年以前の名僧)如來の像を刻ひ其堂類慶長十七年子三月里香堂を建つ其堂大破明治十九年三月當日向區に於て再建す
老樹由來

常境内に古目通七匁半の杉の大樹あり八分枯れの爲の實曆十一年巳五月二十九日元より九間目の處より折れ此外大栗の樹あり一年再實したりと傳ふ右歴史由來に據れば此櫻木は慶長年間より在來せし老樹ならん若し元和年間植付たるものとするも正に三百年來生木したるものなるべし
とあり、げに此樹の古りたる様四五百年以上にもなりぬべし、右文中一語の義仲に及ぶなきより亦時代より推するにも義仲の王植と言ふは恐らくは誤傳ならんか、之より復た木道に入りて一行に加はりぬ、王瀧川は左を流れ緑波巖を嚙みて白雪を飛ばし兩岸には緑樹の茂る邊名も無き所も尙都人士の目を樂ましむるに余りあり
とある茶店の前を過ぐれば木曾川の産なる鱒を焼き居るを見る、拙堂氏の木曾川を下るの記中に見ゆるところの「茶店に懸ひて鱒を進めらる脆美口に媚ぶ」と賞せられし魚なり、余等貧賤生は鱒を進められずして脆美鼻に媚ぶるを覺えたり、進みて常盤橋に至る、此處も亦一勝地と稱せらる、巖の上に橋を架し橋下の流れいと緩うして

水青く時たま小魚の浮き出づるを見る、下流に至りて流漸く急にして所謂なごなたの瀬をなす、上流に視線を遣れば茂れる青の間の白砂の中を流れる様に拘すべきの景となす、橋畔の一茶店にトチノ木の瘤もて作られたるいと珍らしの筆立あり、欲しきまゝ價を問へば貧賤生が爲めには高し少しくまけぬかと言へばこは天下の一品なれば決して高きものならずまげがたしと云ふ、さらばうごんを(うごんを賣り居たり)喰ふてやるからまげよと同行のS君が彌次ればられではうごんが損になると云ふ、なかなか理屈を云ふ老爺かな、止むなく望みのまゝに支拂ひて之を求めぬ、老爺御岳登山記念名簿を持ち來りて誌して呉れと云ふ、洋舟生筆立を求めたるの故を以ての一番に筆とりて誌して曰く木曾山林學校健兒團員久保田洋舟と、次にはS君が代田白雲次には喜多村〇〇、龜子〇〇等と速製の號書き並べて大笑しぬ
此處を立ちて澤渡時に差し掛れば坂路の暑さ漸く堪え難く一行何れも玉の汗、水を飲むことしきりなり、されど元氣は頗る旺盛にして生なかの浪花節など口ずさむ者もありき、峠路の右方には御岳の高峰處處に雪を載きて冲天に聳えたり、王瀧に近づけば峠路よりははや鞍馬峽を望み得て吾等をして既に其絶景たるを思はしむ
十一時半鞍馬の峽上に達しぬ、岸上林内の岩石崎嶇たる間道なき處を下りて峽に出づ、王瀧川の兩岸一方は緑深き檜の山他方はくさぐさの老木の茂れる高き堤にして水際には巖立ちて壁をなし緑深き清流の緩く流れて絶景を爲す、即鞍馬峽鞍馬となす、腰なる握飯取り出して此勝景を眺めつゝ飯し終りて急ぎ小筏を借り木曾の産にて筏に

慣れたる〇君を漕手をして餘と二人乗りて峽に漕げば冷かなる迄に涼し、兩岸には巖奇巖切り立ちて大小を爲し角岩あり圓岩あり突起せるあり凹陥せるあり、上には巖に生せる檜松の混清美林蒼鬱たり、下には巖を爲す、白岩の下碧流潭を爲し漁の筏其間を下る様只形容の拙きを嘆ずるのみ、宜なる哉本多博士の世界の絶景なりと激賞せられたるや、全境目に入るもの總て造化の神の手に成れるものにして一つの人工を加へたるものだになく身は恰も仙境に在るが如し、此處より小舟に棹さして奥深く分け入らば桃花源にも達せんかと疑はる、岸りよの眺は筏に乗りてする眺に及げざること遠し、眞の絶景は峽中に乗り入るにあらずれば觀賞し難きもの多し、筏を活に捨てて岩上に腰を下ろせば涼味襲ひ來りて三伏の暑熱立ちどころに忘る、眞に忘暑の絶境なり。先きに鞍馬の橋に至れる數名の學友は廻りて此處に來り此絶景に恍惚たること良々久し、衣を捨てて水泳を爲すもの筏に乗りて騒ぎ廻りて衣服のまゝ水中に落ち込む者などありて頗る滑稽を極め愉快を盡しぬ、飽かぬ眺めもタイムに制せられて強ひて此處を去り林中岩石の間を縫ぢり小徑に出て表鞍馬(即鞍馬橋)に至る、兩岸岩石の上に架して一橋を得たり水西を距ること甚だ高く其距離二十間程なりと聞く、小石を投じて落下の速度を見るに水面に達するに正に三秒を要せりより計算し二十四間なるを知れり、橋上より見下せば白き岩黒き岩、赤き岩の或は立ら或は横はり或は突出せるあり、檜松等の綠樹は岩の中より生しサツキツツは絶壁の隙間より咲き出てたり、上流にて巖に激したる水は花下に至ては緩

ぎ翠流淵を爲し下流は右に廻りて即裏鞍馬となり繁々たる絶壁の後へに隠る、其流の廻る邊り丸き小石の磊々たるあり橋上より此眺を一言にして竭さんとせば只生ける油納なりと言ふを得べし、橋の袂より廻りて絶壁を這ひ下り水際の巖上に腰打ち下ろして慰へば身は巖に立ら込められ雙眸に入らぬものは總て天然物にして只頭上高く一橋梁の人造物あるのみ、裏鞍馬の仙境たるに及ばずと雖亦一異境たるを失はず、清流に目を注げば五六寸より尺許りのアメ魚の悠々自適たるあり、試みに一小舟に乗りて此峽に浮べんか、四周の岩石鬱林の千種万態應接に暇あらざるべく涼味忽ち襲ひ來りて盛夏の炎暑も打忘るべし、見ゆる限りのの皆造化の巧妙を誇るものたらざるなく此境に在るや將に羽化せんとするの感あるべし、小舟に乗りて意のままに遣らば優に一日の清遊を試むるに足るべし、管城む表鞍馬より裏鞍馬に至る所淺瀬のありて舟を遣る能はざるを、もし此淺瀬だに通ずるを得ば表鞍馬より裏鞍馬に至る五丁が程の間は舟を下して兩岸の絶景を稱するを得べし、されど淺瀬の所に舟を乗せ替ふとするも天然を害せずしてまた興ありとせんか、此絶境未だ世に知らるること甚少し、曩きに木曾の風光を視察せられたる本多博士によりて他の勝地と共に近く世に紹介せらるるべし、斯くて廣く世人の訪ふところとならば相當の設備を要すべきも先づ小舟數片を備ふの必要なるを感ず、また木曾の首府とも言ふべき福島より此處に通ずる道路の改修を爲すの必要もあるべし、亦聞くが如く福島より王瀧村上島に電車を通せんか、都人士及外人の將來此地に遊覧せん者も此處に導きて満足を得ること多くなるも

のあらん、さりながら學びの庭に在る健兒はよし道路の改修は無くとも電車は通せずとも宜しく脚絆に身を固め崎嶇たる峻路を越えて此絶景を探究すべきなり、三時一行此處を去りて歸路を黒澤口に取る、王瀧川の流に沿ひて下ること時余にして大嶋の渡しに出でぬ、此處は往き來の人々自ら綱を繰り舟を遣りて渡るなり、渡れば此處は黒澤にして御岳神社の里宮あり、長き石階を登りて足に數へつゝ社前に跪き、社殿の傍には三十二年五月十日皇太子殿下御婚紀念の杉五本緑濃まやか、に生茂せり、神前には一品轡仁親王の御筆なる「御岳神社」と誌されたる額掲げられたり、宜なる哉御岳神社の世に名高く登山する者の多きや、社前を退きて境内を出づれば檜の良材數多横はれるあり、作業小屋に就いて聞けば中津の材木商小栗氏が御料林拂下を受けて伐採せるものにて王瀧川より木曾川に出し棧道にて陸上し後鐵路によりて名古屋方面に出すものなりと云ふ、階を下りて其處の一茶店に憩ひ名物あんころ餅に力を得て黒澤の峠を越えぬ、峠を下りし頃は暮色蒼然として山はいよいよ麗しく、晝の暑さも去りければ歩行いと易くはなりぬ、されど足の疲れに遅るゝ者も漸く出て福嶋に著く頃は數組となりぬ、七時半頃前後して歸福し各家路を辿りぬ、因に此遠足は常校通學生會の主催にて同會より同行せぬかとの勤めにS君と余との二人に加はりぬ、日曜の閑一日を斯く有益に暮らし得しは大に謝する處、益々斯かる企の多きを加へんこと望まされしけれ

八月一日 余は美濃下米田にものして學友後藤君とともに馬串山に遊びぬ、馬串山は遠くより之を望めばさながら尾切られたる鯨の如し、耕地整理の行はれて心地よき麥浪の戦げる中を貫きたる道に沼ひて公園の登り口に辿りぬ、徑陰くし石轉び甚だ險し、昨日華氏九十四度を示したる地、未だ十時ならざるに炎威燒くが如く、流汗淋漓、眼昏し、扇子の力を藉りて登る、道に石柱あり竹腰林と記さる、漸くにして中腹に至りあづまやに休む、長風一道木曾川の流域より襲ひ來り吾等が爲に煩熱を一掃して爽快然たり、進みて頂屹然として雲表に聳え光を搖かして微笑むに似たり東に惠那山、南に尾張富士(小牧山)西に伊吹、西北に加賀の白山、連峯抜んづ、東南は平原にして中仙道の松並木木曾川に並びて走る、上流に蘂の連れるは伏見の宿なり、十三峠とは伏見より御嵩を経て大井に至る中仙道の部分を云ふ、後藤君木曾川を下りしこともを語る大渡、可兒合尻など云ふ、難所は聞くに汗の冷ゆるを覺ゆ、南に方りて木曾、飛騨兩河の落合あり、西より南に亘りて連なる丘あり、幕引山と云ふ平坦にして年々第三師團の演習行はれ閑靜秋晏に響くとぞ飛騨川の上流に方つて米田富士あり古木蒼鬱たる頂、一神社を祀る碑に傳ふこの山(今より三百五十年程前)米田三千石の領主肥田玄蕃允の居城にして馬串山を其下屋敷となす玄蕃允美濃兼山の城主森武藏守(蘭丸の父)と戦ひて利あらず、比久見の渡を涉りて自及し森氏の有となる、後藤氏尾張犬山の城主成瀬準人に破られ此山亦成瀬氏の領する所とな

馬串山に遊び

細江道人

る後更に竹腰氏に移ると云ふ、馬串山今は村有林に屬し竹腰林といふ、先年より青年會に委ねて公園豫定地となす、山は黒松をもつて復は櫻、楓などを植えたり鯨の頭部、兩側は絶壁にして下に大なる池あり魚屬の住めるにや波紋頻に動く岸邊には誰が乗り捨てし一葉の扁舟波のまに、緩かに漂ふ、惜むらくは立てる木の未だ小さきことよ、されど今十數年を経ず漸く幽邃の趣を呈せん、希くは米田青年諸氏も池に驚を飛ばしめを見を泛ばしめ、自然の風致を傷ふなく捨つたる舟に舵とりて游子に杖を曳かしむるに努めよ、さて逍遙久うして歸途につきぬ、今拙陋の文を綴つて筆紙を費す遊を記す

飛彈の別天地

都竹翠村生

我飛彈の既に日本の別天地西蔵たりしや久しかりき開けゆく聖代の余澤に洩れず進み進みて現代の文化の惠の露にうるほふも幸なれ、され、山又山なれば小きき飛彈のうの中にも亦別天地のあるや宜なり、北國の鎮め白山より飛彈の境に入る處嶺又嶺危橋あり斷崖に懸り天然の大屏風を繞らし名に負ふ北陸の急流射水川の源に散綴せる郷の猿の聲に醒め急奔せる溪水に寝るや小巴蜀の地たらすんばあらず飛彈の桃源白川郷は此處なり古へよりの風俗風習に富めりど、我未だ其地を踐まずといへども幸なるかな我飛彈の名士岡村利平氏著はす所の飛彈山川に載せありと聞き消夏の暇に拾讀なしたるまよの全文を掲げて奇しき事どもを校友諸兄の參考にもと思はるまよに記せり、次の文は飛彈山川所載の藤森峰三氏の記草にして其中の一節なり

「白川村と稱するは飛彈大野町の西部にあり莊川の兩岸に沿ふ之を小分して二十三組とす此地習慣の奇なるは多人數同居なり(一家多きは三十七八人少きも十人以上)又此地方は米作更に登らず故に稗をつくり以て之を常食となせり然れども戸主一人は日々米飯を食せり此習慣につき他より異なるは當戸主或は老衰又は都合によりて相續者へ家政を譲れば其日より直に稗となり其日迄種飯食ひし相續人は忽ち米飯と化すなり、此地は農業を主とし又養蠶を盛んにし一家内に生繭百貫目位を得と云ふ然れども之を糸にせず生繭にて他賣するを例とす漸く昨年頃より(明治廿年)遠山伊助なるもの器械を買入れ此地にて製糸を始めたり又農作は種、大小豆、麥、蕎麥、桑等なり、之を耕作するに別に畑とては少なきを以て山の日向きよろしき地を燒き之を開きて種を下すなり此地雪多き地なるを以て春雪のある中桑の根を鼠に害せらるること非常の困難のよし戸主は農事には更に關せず其指揮者は別に一家中に専任ありて戸主は野に出でず家内にありて家務を司るを以て其年の收入難敷又は繭の何程ありて幾何に賣れたるやを他の者に聞くも更に知らず、戸主より毎家族へ夏衣と稱し麻にて織り之を紺にて染めたるも一枚を仕着するを例とす、又女は之に紋を附するものあり此他衣服は各望に任せり因て春は七日目夏は五日目毎に休日と稱して戸主の仕事なす各自自分の目的とする仕事をなし或は別に畑畑を作り又は山に至り木の實を拾ひ及獵をなし休日にて得たるものを自己の所得となし之を以て我需用費に充つ故に節儉にして能く

勞働するものは衣服履物烟草入の類にても一通りは所持するものあり之に反して或は休日之余暇を働かず又は酒を呑むやうなる輩は一族中にも唯僅に戸主より仕着の儘なる者あり故に一族中にも貧富を異にせり、此地方は宗教を最も信仰し(真宗東門跡派)朝晝夕の三度の食事前必ず佛に禮拜し然る後にあらざれば食に向はず是は老若の差別なく小兒と雖も同様なり、此地方は鶏の雄を飼養するのみにて雌は決して飼養せず食事の支度するものは當主の妻と前戸主の妻にて之を引受け若し手の不足する時は更に戸主より命するなり此地方には竹とては之無き故東京のざるの類は絶て見ず、之に代用するには大木の節をくり抜き恰も火鉢の如きものを使用せり白川村にては火爐を自在に使用するものなく各大小なる五徳を用ひ其直徑一尺七八寸重さ拾四貫ありといふ家は貧富により異なるも其講造に於ては異なることなし小生 藤森氏)の泊せるは長瀬組の組長大塚保太郎方にて此家の間敷十八疊三間拾疊四間にして其中壹間を佛間となし之には疊を敷き恰も寺院の如く佛壇を飾り其欄間には天人を彫刻し又佛具も眞銅等にて佛は金にて塗り他の器物に比して雲泥の差あり又此の間敷外四十餘疊敷ける間ありて之を専所兼仕事場とし下小屋といふ右の如く大なる家屋なれども土間半坪もなし其入口は二坪ばかり少しく低く床を張り其正面に必ず便所あり其脇を半部屋とす此の地方にては佛間の外疊はなし又米穀の出來ざる故藁とては絶へてなし故にむしろに代ふるにすげ

を以て織りたる筵の如き敷物なり又別
ながしを設けず大木を掘り之に外より水
を引き貯へ諸物を之にて洗ふなり其なが
しの邊には風呂桶あり通常の櫛風呂なり
又仕事場の中央所々に鍋の如き大なる器
器に灰を盛りこれにて白かんばを然し此
光によりて夫々仕事をなす其仕事は
履物又は麻を製す畫問男女共野仕事に出
る時は藍の如く丸くして少し深き器の中
へ乳兒を堅く詰め込み浴も坐するが如く
になし之を梯子の如き長き台の上に置き
出で行く若し一家に乳兒五人あれば之を
五つ並べ其臺に載せあり因て晝飯の爲め
歸りし時各生母此臺につき乳を呑ましめ
又兒童は大體跣足なり外より歸り來りて
其儘上に揚る故に其不潔等に至ては別に
記す迄もなきなり、大便所は本家より數
間距りたる處にありて其大小あるも大約
二間に壹間半位ありて其溜桶の大なる凡
ろ一間半以上此上に板を敷渡し中央二
枚程あけて之を切落しとす又前後に大木
をくりたる箱の如きものあり之に草を盛
り以て紙に代用す此廻りの壁には肥桶
つこうの如き農具あり一寸見たる所に
ては長屋の如し又土蔵は本屋より十數間
を距り此地方は山間なるを以て賊の憂
なく只火を用心するのみなり(東京人類
學會雜誌第三卷二十九號)

もに好箇の研究室たるを失はざるなり
我はたど聞きしのみ折よくば一度彼地に臨
み美しき古の空氣愛すべき人情を偲びたき
のなり

狂夫獨語 狂夫 生

自覺すべし、否自覺せよ、自覺せよ、呆然
たる勿れ、蘇峽の天地眠る時、眼目靜塵沈
思せよ、生字引たるに屹々たるよりも遙に
急務、大に得策、校風の發展、寮風の刷新
其の根本は凡る斯自覺にあり

學課に吞まれ、教師に吞まれ、試験点に吞
まれ、席次の上下に神經を惱ます輩は到底
共に語るに足らず、服従は美徳なり、然れ
ども思へ、奴隸的服従と眞の服従との意義
を、奴隸的服従は斷じて堂々たる男子の探
る可き態度にあらざ

見識を具へよ物知り書籍虫となる勿れ、之
なくんば人にして人にあらざ、無定見の字
引先生嗚呼憫むに堪へざるなり

活氣あらざれば萬事休す、天下の事一に
氣にあり、活人物たるを期せよ、器械的重
箱的、鵝鶩的、此等は凡て前世紀に屬す可
き者、二十世紀の新天地に於ては斯る言辭
の消滅を期せざるべからず

雜報

學校及寄宿舎便り
○第一學期試驗 は七月十五日に始まり廿
四日終了翌二十五日より直ちに實習に着手
し苗圃及山林の手入をなし三十日まで續行
する筈なりしが、長くも御大喪に會ひ二十
九日打止めとせり

○哀悼式 七月三十日朝長くも我が 聖上
陛下御崩御の旨告示せられしを以て職員生
徒一同痛惜深悼措く所を知らず午後一時講
堂に於て哀悼の式を擧げ七宮教諭告示を拜
讀し終て 陛下の御病歴より今日に至る概
容を述べ至仁至愛なる 國父陛下を失ひ奉
りしは恐懼深悼に堪へざる旨を述べ尙大喪
中の心得等を説き論し哀愁のいと靜肅に
式を閉ちの同日は一同謹慎し外出するもの
とてもなかりき

○終業式 三十一日午前八時講堂に於て舉
行七宮教諭休暇中の心得數ヶ條を説き論し
北村教諭は生徒一般特に三年生に對しては
此休暇中各自學術の研究を委囑され九時前
式を閉ち因に各自の研究は一冊として學校
に提出し指導教諭の檢閲を経永く學校に保
存し尙適當なるものは林友誌上に登載する
都合なり

○學校參觀者 頃來學校參觀者はつゞ増
加せるが七月中の主なる參觀人は愛知縣立
農林學校林學科生十名及更級郡青年實業團
數十名なり

○寄宿舎狀況 昨年は梅雨期と同時に脚氣
患者其他續々發生せしに鑑み本年は生徒各
日攝生に力の五月末より米麥混食を勵行し
始めは二割交せ位より漸次増量して四割交
せし其他學校に於ても時々實習を課し連
動十分せし爲か比較的脚氣患者の減少を見
たるは大に喜ぶべし

七月廿九日は長くも 聖上陛下御薨御の公
報に接せしに依り舍生一同は謹愼を表し外
出を止め一向 陛下の御平愈を祈願せり尙
舍生一同は翌日未明を以て水無神社に參拜
し忠誠を凝して神明の加護を請ひ奉らんと
し明ければ三十日午前三時起床一同洗面を
終へ出發の用意將に成らんとする頃悼し
い哉天上の悲報は電話によりて受取られぬ
依て余監は組長に組長は各室長に右の趣を
傳へ參拜を中止し其儘各自の室内に閉ち籠
り講愼哀悼の意を表することとなせり夜明
に至るまでは舍内關として聲なく哀愁誠切
切なるを覺わぬ斯くて夜は明けたれど愁の
雲は霽るよに由なく午後後の哀悼式には遙か
に東天に向ひて御冥福を祈り奉り越えて三
十一日の終業式を済ましつもの欣然たる
に引換へ悄然として各歸省の途に上りぬ

○新校長任命 江畑校長轉任後暫く缺員中
なりし校長は八月七日附を以て本縣林務課
安藤技師任命せらるゝ事となり先生は蘇
に東京帝國大學林學科を卒業され數年間奈
良縣立農林學校に職を奉じ昨年本縣技師に
轉任せられし人なり吾等は新に良校長を得
たるを喜ぶ

鳥取縣庄遠藤治一郎君より通信

拜啓時下炎暑の砌りに候處諸先生始め在學
生諸君愈々益々御清祭の段大慶に奉存候次
に校友諸兄の各地に御活動振り雄々敷林友
紙上に拜見仕り候につれ如何許り心強く感
せられ嬉しき限りに奉存候降而迄生永らく
鳥根縣蘇川郡役所に奉職罷り在り候處今般
鳥根縣へ轉任仕り専ら林業の基木調査に従
事仕り候間不相變御機交の榮を得度従つて
將來御文通表記へ奉願上候何卒暑中御自重
特に奉祈候

會員諸君に申す 編輯局より
七月號林友印刷意外に手間取り爲に發送遅
延止むなく八月號と同時に御送附申上候間
左様御承知被下度怠慢の罪は幾重にも御容
赦願上候

會費領收報告
豐岡宛松本清太君伊東兵太君、七十二錢木
村康三君、五十錢宛中田康雄君、赤岩藤太
郎君、遠藤治一郎君、坂本忠治君、三十三錢
宛吉村金次郎君、北川信美君、塚本三樹君、
川村克人君

正誤 第三十一號所載會費領收報告中服
部正義君と記せしは「脇田正義」の誤に付
訂正す

江畑前校長へ紀念品贈呈に付
金員寄附者左の通り
六圓長谷部兵治君、二圓宛水橋要作君、南
勝右左門君、原田久保作君、壹圓五十錢宛
林恒君、松本清太君、原七郎君、壹圓宛石
三郎君、寺嶋俊一君、新田忠次郎君、小石彌
三郎君、和田守衛君、岡戸郁二君、吉田佐
十郎君、塚本三樹君、山村克八君、肥田幸
一郎君、伊東兵太君、五十錢宛中田康雄君、
君、瀬袋義壽君、米山修君、遠藤治一郎
上田三君、多田慶次郎君、中嶋昌利君、
杉本直君、西尾長一君、篠原爲一君、赤岩藤
太郎君、伊藤徳之丞君、宮入汎省君、曲田秀
二君、木村康明君、北川信美君、宮崎惠喜
十君、坂本忠治君、若林遊喜尾君 (八月
十日迄の分)

附錄

三年級修學旅行日誌(續)
五月廿五日、土曜日 晴天
自鎌倉至靜岡午前七時三十分三橋旅館を出
發し江の嶋に向ふ進行事暫くにして道は海
岸に出づ渺茫たる相模灣に白帆の浮べる様
面白く遙かに見ゆる富士の白雪を嘆賞しつ

つ進む中早くも片瀬に達し龍の口寺に詣づ
常所は文永八年九月十二日子丑の刻日蓮聖
人特に死罪に處せられんとせる砌り其遺世
界の中には日本國日本國の中には相模國相
模國の中には片瀬片瀬の内には龍の口寺に日
蓮が命を留め置けし事は法華經の御故なれば
寂光土とも謂ふべきかと仰せられたる御靈
跡なり又元治元年九月七日蒙古使杜世忠何
文著外三名の處刑せられし處も此所なりと
云ふ此所より數丁にして江の島に渡る長き
板橋あり(往復參錢の橋賃を要す)嶋は名
物蠔螺の壺焼き具細工を賣れる店多し 黒
松常緑潤葉樹等碧海と翠を競ひ風景絶佳な
り藤澤驛より汽車に乗る豫定なれば僅かに
餘す三分にて大急にて辨天神社に詣て夫
れより巖々たる岩道を驕足にて進み十町計
りにして窟に至る棧橋に至り此所より外
觀を見直ちに引き返し片瀬に歸り電車にて
藤澤に達し十時五十八分發の汽車にて靜岡
に向ふ茅ヶ崎大磯の附近は海岸一帯に黒松
多し一瀉千里の我が汽車は走り走り御
殿場附近に至れば白雪皚々たる富士の高峰
屹然として眼前に見え勝景言はん方なし御
殿場より佐野驛附近には杉の植林せるもの
多し進みて富士驛に至れば車窓より廣大な
る富士製紙會社見ゆ尙此の附近には梨を栽
培せる處多し夫れより二三の驛を経て興津
に下車し園藝試驗所を視察す

五月廿六日 晴天 自靜岡至濱松
朝七時七分靜岡驛發下り列車に乗じて島田
大井川金谷等を経て九時二十八分濱松に着
し直ちにステイション前なる旅館油屋に一
休後濱松樂器會社に至りて參觀す同社の創
立は明治十八年個人經營に始まり同三十五
年株式となれるものにして資本六十萬圓を
有し東京大坂大連に支社を有す然して東京

水下の法一割以上水上の法五分以上とし岩石所任の箇所又は地盤硬質の箇所に起工し根石を地盤床に設置し石を以て築上るものなり

苗木、苗木は最初苗圃に播種して培養して翌年第一回床替めなせるものを用ひ黒松は長凡一尺以下八寸以上赤揚及山登は二尺五寸以下一尺以上にして即ち二年生のものなり萩は山地より掘り取れるものと苗圃にて培養せるものを用ひ薄は静岡岐阜方面より買入る

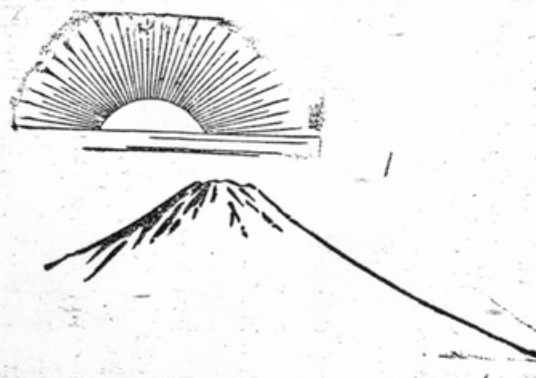
作業順序、毎年四月初旬起工して法切及溪留工を行ひ次で傾斜地の造成さるに随ひ積苗工連東葉筋工山腹法切跡水路張芝工を施し而して芝薄萩等の植栽をなすに依りて本工を中止し六月下旬より九月中旬に至るの間溪間に係る堰堤護岸工床固工等を施行し九月下旬より再植苗工、連東葉筋工、張芝工等を行ひ十二月の頃に至れば各種の工事漸々竣工するを以て苗木の植栽に着手し一日より立春に至る間は中止し二月中旬頃より再植栽に従事し三月下旬に至り全竣工するものにして即本砂防工に於ては四月より翌年の三月迄を一ケ年度となせり

各工事平均工費、積苗工(一間に付き)五十七錢六、筋工(同)十二錢六、溪留工(同但し高三尺)一圓十四錢、溪間張芝工(一間に付き)四十四錢、床固工(鐵線蛇籠工)一間に付但し徑二尺)二圓六錢、土堰堤(立一坪に付)四圓二十四錢、石堰堤(同)十二圓六十六錢、ホフマン氏工(一反付ニ付)一十六圓四十五錢、次で北村先生より右の説明あり當地は暖帯林、屬するを以て若干年前には檜、推、類を以て被はれ居りしならん然るに山林亂伐の結果遂に落葉闊葉樹に變じ次で赤松并じ續て陶業勃興し維新後に至

り亂伐に亂伐を重ねたるは一は地質沖積層に屬して花崗岩より成り土壌輕鬆なるを以て現今の如く荒廢を來したるものなり然れ共礫砂の間に割合に多く土砂含有せるを以て比較的砂防工を容易ならしめたるものなりと夫より山を下り宇印所なる、ホフマン氏設計砂防工事視察に向ふ途中陶器製造工場を視る聞く處によれば當町の戸數は約三千五百戸にして内八割に陶業を營み年産額約三百萬圓に上ると云ふ而して産額の三分の一なる一百萬圓は燃料に要す燃料は専ら松にして(西詳窓として石灰を用ふるあれども成績不良なり)と長野岐阜地方より買入れ長一尺まはり四尺目方約四圓目のもの一地の價二十錢なりと云ふ、約十町程にしてホフマン氏工に至る、木工は風雨の力によりて自然に崩壞する土砂によりて漸次傾斜を緩かからして以て天然的に砂防の目的を達せんとするものにして其土砂の多量の流下を防がん爲め石堰堤を設けたるものなり而して其放水路は山頂に近き上方は蛇籠工(氏の設計當時のものには柳を以て製せしも長く保存せしが爲め其後特に氏の許可を得て線鐵となせり)を以てして山裾の下方の石、江を以てせり而して普通の放水路は多少の傾斜着したるものなるも氏の工にありては殆んど傾斜を着せしめて水を直下せしめ代りに水叩杵を堅固となし之によりて落下したる水を直に配水とし以つて次の堰堤に送る如く作れるものなり之等種々の説明を受けて内を下り陶器學校及陶器館を參觀し正午電車停留場に歸り土屋技手に厚く禮を述べて別れ同十分加藤技手と共に電車に乗りて大曾根驛に向ふ途、電車脱線をなす汽車に乗り後れんことを憂へたるも幸に難なく復舊し午後一時十分大曾根

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

下車し加藤技手と別れを告げ停車場に集台し約四十分を待合せ二時七分發列車に急歸校の途に就く最早歸ると聞きては十數日間の心身疲勞一時に發現し車中一人として眠らざるものなし然れども須原上松の聲を聞くに及んでは懐しむらゝと胸に湧き出て停車場に待つ一二年級諸君の懐しき顔なご眼前に浮んで眠りもやられずかく木曾福嶋の聲を聞きしは正に午後八時懐しき師の君懐しき一二年諸君の師の電燈の影にゆらめきし時我等は言ふべからざる欣ばしさを感じ又一同停車場庭に整列して無事の歸校を賀し北村先生より旅行中の感想及今後に對する希望を述べられて茲に解散一二年級諸君に擁せられ土産話に花を咲かせつゝ無事歸校せり(完)



明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可